

若手の会企画による小集会 (2) 「これからの安定多収に向けた作物学の役割」開催報告

服部太一郎¹⁾・氏家和広²⁾・三王裕見子³⁾・塩津文隆⁴⁾・曾根千晴⁵⁾

¹⁾ 鳥取大学乾燥地研究センター, ²⁾ 日本大学大学院生物資源科学研究科, ³⁾ 作物研究所,

⁴⁾ 愛媛大学大学院連合農学研究科, ⁵⁾ 岡山大学大学院自然科学研究科)

2006 年 10 月 28~29 日に香川大学で開催された日本作物学会第 222 回講演会 (楠谷彰人運営委員長) において、「若手の会企画による小集会 (2)『これからの安定多収に向けた作物学の役割』」を行った。本小集会は、作物学会若手の会が企画・運営したものであり、若手研究者の交流促進やオープンな議論の場の形成などを目的としている。講演会 2 日目 (10 月 29 日) の 12~13 時に行われた本小集会には、昼休みの時間帯にもかかわらず、60 名を超える研究者が参加した。参加者の中心は学部生、大学院生やポストドクであったが、中堅あるいはベテラン研究者の姿も多くみられた。

小集会では、はじめに講演会会場となった香川大学の作物学研究室を代表して、大学院研究生の井上正明氏による研究室紹介が行われた。水稻の登熟や食味、コムギの子実形成などに関する研究の紹介とともに、研究室の設備や雰囲気などについての話題が提供された。

続いて、Africa Rice Center (WARDA) の二口浩一氏から「安定多収イネ品種育成に向けての作物学研究者の役割」と題する講演が行われた。講演では、WARDA において同氏が携ってきた NERICA 作出に関する研究を具体的な事例として取りあげながら、「作物生理学者は育種に対してどのような貢献ができるのか」という点が論じられた。育種プロセスにおいては、「選抜指標あるいは選抜方法の開発」、「圃場レベルでの有望系統や登録品種の詳細な特性評価」、「育種目標の提示」、「タンパク質含有率など栄養的特性の分析に基づく初期世代での品種選抜へのアシスト」などの点で作物生理学者の貢献が可能である。特に「育種目標の提示」は重要であり、これまでも国際稲研究所 (IRRI) の IR8 や WARDA の NERICA の開発過程において、作物生理学者が大きな役割を果たしたことが知られている。また新たな NERICA の育成に向けて、*Oryza glaberrima* の特性、すなわち初期成育、複合的ストレス耐性や耐倒伏性、脱粒性の改善などに着目した作物生理学的な研究についての報告があった。

講演後の質疑応答では *O. glaberrima* の特性や伝統的育種と近代的育種のバランス、作物学者の役割などに関する質問がなされたが、議論の中心は作物生理学者と育種家との

関係性が海外と日本で異なっているのではないか、という点についてであった。海外では作物生理、育種、土壌、病理など異なる分野を専門とする研究者が一つの研究グループに所属し、共に品種育成に取り組む場合が多いが、日本では各分野間の連携が比較的弱い傾向にある。こうした現状の認識は、特に若手研究者にとって、自らが志した作物学の意義や今後の研究展開などを考える良い機会になったのではないだろうか。

本小集会では「安定多収」や「作物学の役割」「育種学との連携」といった、多くの研究者の関心を惹きつけやすいキーワードを掲げ、年齢や経験に関わらない議論の中で交流が促進されることを期待した。小集会終了後の懇親会を含め、若手同士あるいは異なる年齢層との交流を促す上で一定の成果があったと考えられたが、一方では改善すべき点も多く見受けられた。

小集会後には、作物学研究を志す若手が抱えている問題や悩み、若手の会が学会に求めていることを把握し、より良い若手の会を構築することを目的としてアンケートを行った。小集会に関するアンケートでは 41 名から回答を得られ、参加者の大部分が満足と答え次回も参加したいと述べた。しかし企画の方法や小集会内での交流不足の点を改善すべきとの指摘もあった。また講演会当日、および若手の会メーリングリストを利用して行った若手研究者の現状に関するアンケートでは、現在の研究環境、作物学会および講演会に期待することなどについて 107 名から回答を得られた。その中で、若手から作物学会に期待する支援としては、就職および研究助成への支援および情報の告知が合わせて半数以上を占め、将来に対する支援の充実があげられていた。フリーコメントでは、学会全体としての研究の方向性や展望についての意見があった。両アンケートの詳細については学会ホームページに公表した。

今後は、周囲の御助言やアンケート結果を真摯に受け止め、会の改善と活性化を進めていきたい。若手の会では 2007 年 3 月の日本作物学会においてミニシンポジウムにおいて、「フィールドワークの実践とそこから見える土壌と作物の関係」を開催した。諸先輩方からの御指導、御支援を賜うことができれば幸いである。